

「葛巻昌興日記」にみる金沢城二ノ丸御殿の呼称と用途

石野 友康

はじめに

近世城郭の御殿空間における各部屋の機能については、江戸城・二条城あるいは、江戸屋敷の研究成果に比べると、国元である諸大名の居城の研究は、立ち後れている。加賀藩前田家の居城である金沢城の場合も例外ではない。本誌第3号における、田中徳英氏の検討が直接的にこの課題に取り組んだ数少ない成果の一つであった⁽¹⁾。田中氏は、絵図類を中心に、幕末にいたる御殿の変遷を述べるとともに、儀式書より二ノ丸御殿の各部屋について分析されている。

城郭絵図を史料として活用する場合、徹底した史料批判が必要であることはすでに指摘されているところであり⁽²⁾、より信用にたる文献等他の史料によって補強していくという課題が残されている。また、田中氏の検討は、江戸前期から中期にもふれながらも、主としては江戸後期であり、氏自身17世紀に御殿の平面構造の基本があることを指摘されながらも、主題ではないこともあってか、絵図における記載情報を紹介されるにとどまっている。そこで、本稿では、田中氏の研究に触発され、17世紀後半という段階において、各部屋の呼称やその機能がどのようなものであったのか、絵図史料を補完する文献のなかから探っていきたい。その際、私が利用するのはその当時に生きた藩士の日記である。藩士の目を通して御殿内の各部屋の記述がどのように描かれているのか考察していきたいと考える。

1 「葛巻昌興日記」と二ノ丸御殿の変遷

この時期、藩主や藩政の動きについて詳細な内容をもつ文献史料に「葛巻昌興日記」(27冊 金沢市立玉川図書館加越能文庫、以下「昌興日記」と略す)がある⁽³⁾。

標題のとおり、加賀藩士であった葛巻昌興の日記で、記述は延宝5年正月から元禄5年12月の16年間にわたっている。本日記は、明治41～42年に刊行された近藤磐雄『加賀松雲公』(全3冊)や森田平次『金沢古蹟志』などのなかにも取りあげられ、早くも明治期からこの時代の世相を描く史料として注目されてきた。

本日記は、金沢や江戸における藩主の動きや武家儀礼、藩政の動き、大名同士の交際など、この時期の大名社会をみていくうえできわめて重要な史料となっており、全国的にも注目されている。いわばこの時期の二ノ丸御殿にもっとも精通した藩士の日記ということになる。しかし、彼個人の目を通しての記述であるために、はたして、記述の内容が、当時の人々全体の通念であるのか、客観性がどこまで図られているのかという疑問が存するであろう。

加越能文庫がもともと前田育徳会尊経閣文庫の蔵書であったことは知られているが、「昌興日記」がどのような経緯で旧前田侯爵家の手に帰したかについては十分には考証されていない。森田平次筆の「加越能書籍一覧」二⁽⁴⁾には、「葛巻権佐自記」としてその概要を記している。この書によれば、天明6年に昌興の一族で人持組の大野木舎人(克成、昌興の兄大野木克明の孫)が藩主治脩に昌興筆記をすべて差し上げるよう命ぜられ、献上したものであるという。明治4年に平次が旧藩時代の文庫の書籍を調査したときに、「葛巻権佐筆記類」と書き付けた櫃中に昌興の自記数冊や自筆の冊子を種々納めてあるのを確認しているの、そのなかに含まれていたであろう。

「昌興日記」には、「日録」とするものや「貞享五年日録」などと年号を付した内題が付され、「藤久矩誌」、「藤昌興誌」などと署名している。

著者の葛巻昌興は、内蔵助久俊の三男で、通称多門、のち仲四郎、権佐、諱を高俊、久矩などと称

した。葛巻家は、もと大野木氏で近江の出身。その祖十右衛門は、柴田勝家、豊臣秀吉、堀秀政に仕えた後天正十五年に利家に仕えた。ついで養子昌俊（隼人）は、天正18年に利長に仕えて以来、加増されて四千石となり、正保期、本多政重、横山長知没後の年寄衆再編で誕生した年寄衆六人衆の一人に加わった⁽⁵⁾。慶長頃の金沢城を描いた絵図⁽⁶⁾には、現在の大谷廟所の辺りに「桂巻隼人」の名が見られるが、彼のことを指している。この隼人の子が久俊で、久俊の子が昌興である。

昌興は、新知として250石を拝領して以来加増され、元禄3年に850石となり、奥小將を勤めたが、高山在番をめぐり藩主綱紀を諫言したため、身分不相応として処罰を受け、知行召し放し、遠島を申し付けられた。宝永2年3月、配所において五十歳で没した。

昌興は教養人でもあった。とりわけ和歌に造詣が深いことは、この日記でもうかがえるが、いわゆる加賀藩の文治政治を推進した綱紀の影響を色濃く反映させた人物の一人であった。

昌興のこうした文化的な部分等を明治年間に編輯方によって抄出して成立した「葛巻筆記抜書」⁽⁷⁾「葛巻昌興筆記抜書」⁽⁸⁾「葛巻昌興日記抄」⁽⁹⁾「葛巻昌興自記抜粹」⁽¹⁰⁾など抄本の形で加越能文庫や石川県立図書館等に所蔵されている。

昌興の生きた時代は、名君として知られた五代藩主綱紀の時代であった。次に、綱紀の時代にいたる二ノ丸御殿の変遷について述べておきたい。

藩主の居館としての御殿は、もともと金沢城内でもっとも標高の高い（60m）本丸に位置していた。本丸の周辺は、天正14年ごろに天守が建立され、その後高石垣が築かれるなど、天正11年に入城した前田利家によって整備されていった。御殿もこの本丸に築かれ、「尾山のひろまへかみなり落申候」⁽¹¹⁾とある「ひろま」は、おそらく本丸御殿の「広間」であったと解される。「御本丸御屋形」⁽¹²⁾とも記される御殿は、度重なる火災の被害を被った。まず、慶長7年の落雷により、天守が灰燼に帰したが、金沢御堂以来の建物を活用した御殿も焼失したとされる⁽¹³⁾。翌年天守の代替としての三階櫓が建てられ、おそらく同じころ御殿も再建されたとみられる。元和6年、再び「御本丸表奥方の御屋形」を焼失する火災に見舞われ⁽¹⁴⁾、さらに、寛永8年、城下からの火災によって本丸は罹災した。この寛永の大火では、本丸全体に被害が及んでいて、御殿が焼失したとの記録はないものの御殿も焼失したとみてよいだろう。火災後に進められた再建事業では、「二三の丸ひとつになされ」る普請が行われ、芳春院丸西側の堀が掘削された。そして二ノ丸に藩庁や藩主の生活空間としての居館が築かれ、以来幕末維新にいたるまで、新たに築かれた二ノ丸御殿を中心に藩政運営が行われることになった⁽¹⁵⁾。城内にあった諸士の邸宅も城外に遷されたとされるから、ここで城内のあり方は1つの画期を迎えた。

寛永16年、3代藩主利常は、家督を嫡男光高に譲り、小松に隠居した。このとき二男利次・三男利直が分封して富山藩・大聖寺藩がそれぞれ成立した。藩主として光高は江戸にあることが多く、学者

「葛巻昌興日記」（加越能文庫）構成

巻数	標題	記述年代	昌興署名
1	丁巳日記	延宝5年元日～12月	
2	戊午日記	延宝6年元日～12月	
3	己未日記	延宝7年元日～4月9日	藤原高俊誌之
4	延宝己未日記	延宝7年4月9日～12月30日	大野木藤原高俊誌之
5	延宝八年記	延宝8年元日～4月28日	藤高俊誌之
6	延宝八年記	延宝8年5月1日～6月30日	藤高俊誌之
7	日録	延宝8年7月1日～8月30日	藤高俊記
8	日録	延宝8年閏8月1日～9月29日	藤高俊記
9	日録	延宝8年10月1日～12月30日	中四郎藤久矩誌之
10	日録	延宝9年元日～4月16日	葛巻仲四郎藤久矩誌
11	日録	延宝9年4月17日～6月28日	藤久矩誌茲
12	日録	延宝9年7月1日～12月30日	藤久矩誌茲
13	日録	天和元年10月15日～12月30日	
14	日録	天和2年元日～4月9日	葛巻仲四郎藤久矩誌
15	日録	天和2年4月10日～6月20日	藤久矩誌
16	日録	天和2年6月21日～12月30日	藤久矩誌茲
17	日録	天和3年元日～12月30日・延宝8年	藤久矩誌
18	貞享二年日記	貞享2年元日～12月29日	藤（花押）
19	貞享三年日記	貞享3年元日～4月晦日	
20	貞享三年日記	貞享3年5月1日～12月29日	
21	貞享四年日記	貞享4年元日～12月晦日	藤昌興誌
22	貞享五年日記	元禄元年元日～12月29日	藤昌興誌
23	元禄二年日記	元禄2年元日～12月29日	藤原昌興誌
24	元禄三年日記	元禄3年元日～12月30日	藤昌興誌廿五歳
25	元禄四年日記	元禄4年元日～12月晦日	藤昌興誌三十六歳
26	元禄五年日記	元禄5年元日～7月29日	藤原昌興三十七歳
27	元禄五年日記	元禄5年7月晦日～12月晦日	

大名としての誉れが高かったが、金沢城の管理については、きわめて消極的な態度であった⁽¹⁶⁾。

正保2年に光高が早世すると、光高の嫡男で幼少の犬千代（のちの綱紀）が祖父利常の後見により5代藩主となったが、江戸の藩邸で生活しており、小松―江戸の体制で藩政が進められた。そのため金沢城は、城代の管理にまかされるままとなった。

利常は、万治元年小松で急逝し、保科正之や来藩した巡見上使など幕府の主導によって綱紀の藩政が開始された。綱紀が、初入国をはたすのは、寛文元年で、20年ほど十分な対応がされていなかった金沢城を再び藩主の居城として整備に着手するとともに、城下の再編にもとりかかった。小松―江戸体制から金沢―江戸体制への切り替えがはかられたのである。金沢城の整備は、まず、石垣の修築から整備が始められ、寛文2年、7年、11年と石垣の修築願を幕府老中に提出し、許可をもとめた。現在、城内には寛文期に修築された石垣が確認することができる。石垣修築とともに、城内の作事も進められたようで、寛文7年の史料によると、東北から大量の草摺等が宮腰浦に輸送されており⁽¹⁸⁾、おそらくは、城内建造物修築のために使用された材木であったとみられる。

さて、寛文期から元禄期にかけての二ノ丸御殿については、絵図研究がおおきな進展をみせている。濱岡伸也氏は、金沢城全域図、二ノ丸（御殿）図の編年化を試み、とくに、「金沢城座敷之図二ノ丸」を元禄10年頃の内容を描くとし、また「金沢御城絵図」では馬場を描き、御居間先土蔵が四角い形をし、さらに表舞台の便所の所在により、宝暦大火以前、元禄末年のものと結論づけられた⁽¹⁹⁾。

一方、木越隆三氏は、二ノ丸御殿図の分類と編年の再検討を行い、宝暦大火以前の二ノ丸御殿図を6点とし、うち元禄頃のものとして、「金沢城二之丸座舗之図二ノ丸」（金沢市立玉川図書館）、「金沢城座敷之図二之丸」（石川県立歴史博物館）の2点を取りあげ、前者を綱紀初入国以降、元禄7年の御居間廻り・御広式改築、部屋方増築以前の図であるとされた。また、後者については、御部屋方約900坪が新築され、奥書院や正徳年間に初見の松の間が描かれていないことから、それ以前の図とされた。木越氏は、天和～元禄期の文献に「柳の間」「小書院」「檜垣の間」と「白書院」「黒書院」が混用され、黒書院、白書院の呼び名が併用されており、文献による部屋呼称の変遷の考察については、今後の課題とされた⁽²⁰⁾。本稿は、この点についての検討にもなろう。なお、濱岡氏が元禄末年の景観とした「金沢御城絵図」を宝暦5年の景観を描いた、宝暦5年系の絵図とする。

田中徳英氏もこの2つの絵図について、「金沢城二之丸座舗之図二ノ丸」は、元禄9年9月の二ノ丸新殿上棟以前の景観を描いたものとし、「金沢城座敷之図二之丸」に関しては、「黄紙御古家、青紙御新宅」との注記に注目され、「御古家」としてある部分については、「桃山・江戸初期の武家住宅の伝統形式にみられる名称が垣間みられる」と評価する一方、文化期再建に再建された大広間など表向き部屋の基本の形は天和3年までにさかのぼると指摘された⁽²¹⁾。

さて、木越氏が課題とされた文献史料では、これまで貞享から元禄にかけての二ノ丸御殿修築費用についての書き上げが確認されており⁽²²⁾、

貞享3年 御家御住居替・御新宅共御入用 567坪余、98貫856匁

元禄7年6月～8年6月

二ノ丸作事入用 261坪、486貫143匁3分

元禄9年6月～10年閏2月

二ノ丸作事入用 627坪余、921貫463匁7分7厘

との概要である。しかし、この外については従来未検討の状態であった。「昌興日記」では、貞享3年の修築についての記述もみられ、その実態は知られてはいなかった。煩雑ではあるが、これまで取り上げられることがなかったので、煩を厭わず日付を追って記してみる。

- (1) 今度御改被遊御新宅之御指図重而少々御改被遊、其儀相済ニ付、御指図可相渡旨、被仰出、今朝長屋平右衛門江相渡之、(7月24日条)

- (2) 今般、御普請ニ付、白書院并御奥方之内御しつらひ被仰付、此所ニ御移被遊之、
(7月25日条)
- (3) 唯今迄之御居間廻こほし申事、今朝より取懸申也、(7月26日条)
- (4) 今日、御新宅建初之、尤不及柱建等之儀也、(8月6日条)
- (5) 御居間前御舞台、頃日出来之处、不応 御意(8月26日条)
- (6) 御舞台出来(8月28日条)
- (7) 御座間辺、内造作昨晚有増仕廻、(9月1日条)

これらをみると、貞享3年の御殿作事は、7月から9月にかけて行なわれ、白書院と奥方の内に仮の御座所を設け、御居間廻を一度毀して建て直していた様子が伺える。

2 ノ丸御殿各部屋の呼称と用途

次に、「昌興日記」のなかから、御殿内の各部屋の記述のある箇所を抄出し、多くの事例を得ることができた(巻末[参考]にその一部を掲載した)ので、それに基づき各部屋の特徴についてみることにしたい。さきに、絵図の史料批判が課題となっている旨にふれたが、今回の事例は、絵図の編年を進めていく上で重要な指針となるであろう。ただ、この抄出作業で十分気をつけなくてはならないのが、金沢城の記述かどうかという点で、昌興は職務上江戸のことも金沢のことも記述している。そのため、在国期間の把握はきわめて重要になる⁽²³⁾。なお、各部屋の記述は、城内で行われる諸儀礼の内容とともに記すことがほとんどで、そこからそれぞれの部屋がどのように使われているのか伺い知ることができるのである。

近年、近世の儀礼研究はさかんに進められてきており、成果をあげているが⁽²⁴⁾、幕府における儀礼が主流であり、江戸東京博物館で開催された「江戸城展」(2007)においても、江戸城を舞台に展開されていた諸儀礼について目を向けた展示となっている。しかしながら、全国の大名家でも、その居城等において儀礼は行われているものの、未だ事例の検出は少数であり、彦根井伊家の儀礼についての例⁽²⁵⁾を除くなら、各藩における儀礼については十分な検討がなされていないのが実状であろう。金沢城における儀礼についても十分に明確にはされていない。金沢城における儀礼の全体像については、別稿に譲らざるを得ないが、毎月1日・15日、人日(1月7日)・上巳(3月3日)・端午(5月5日)・重陽(9月9日)の5節句に諸士が登城することが原則となっており、藩主への拝謁の儀礼が挙行されるほか、藩士たちにとってきわめて重要な家督相続、新知拝領、役儀任命なども金沢城を舞台にして行われるのである。ただ、文献史料は、視覚的ではないために、その部屋が御殿のどこにあったのかを特定できず、そのため絵図の援用は不可欠となる。絵図も活用し、上記の課題にせまりたい。

さて、「昌興日記」の金沢城関係の記述部分を抄出していくと、①17世紀には確認できた部屋で後代では、確認できないもの(白書院、黒書院、大書院、表座間など)、②後代と同じ名称で継承している部屋(小書院、柳の間など)に大別できる。

後者については、名称は後代のものと同じではあるが、用途は必ずしも同じとは限らない。藩政の機構が調えられ、二ノ丸御殿は綱紀のもとで拡大・整備していったことから、その過程で、変化していったことは十分考えられる。以下、各部屋の呼称や位置関係について個別に検討し、そのうえで17世紀後半の各部屋の機能(使われ方)について述べていきたい。

(1) 白書院と黒書院

最初に、白書院と黒書院についてみていこう。白書院・黒書院は、後代みられなくなったものの代表例である。白書院・黒書院とも江戸城や二条城などに確認できるから、おそらくは、江戸城など幕

府系御殿の影響を受けたものであったろう。しかし、江戸後期の史料を紐解いてもこれらの呼称記述はみられず、この時期特有の呼称であったとされている。

それでは、金沢城の白書院・黒書院はどのような部屋であったのであろうか。まずは、白書院である。

田中徳英氏によれば、白書院は、「参議公年表」⁽²⁶⁾元禄6年4月1日条に

朔日、出仕相済、大場源大夫・富田弥兵衛御礼、畢而御礼ノ息方数輩御礼相済、芳春院

紫野登城、御目見、畢而於白書院御料理出、伴僧兩人、同所縁通ニテ御料理被下之、

と京都紫野の芳春院が登城した際の記述を最後に見られなくなるとされ、17世紀末ごろに文献史料から姿を消した部屋である。

「白書院」の付近は、のちに「小書院」と称するようになっていたとされる。前掲「金沢城二之丸座舗之図」、同「金沢城座敷之図二之丸」に「白書院」と記されているが、18世紀前半の景観をあらわしていると考えられる「金沢城図」(横山隆昭氏蔵)では、白書院のあったあたりに「小書院」となっていることで、白書院から小書院への変化がみられる。文献においても「白書院」と「小書院」とが同じ部屋を指すであろうことは、次の事例からでも伺い知ることができる。

藩の家老の日記「御在国覚書」一⁽²⁷⁾天和元年正月15日条には、

一、五つ半過、白書院江御出、御熨斗目・半上下御着用、例月出仕之面々、其外未年始之御礼不申上面々、御礼申上、

と記され、熨斗目・半上下を着した藩主綱紀は、月次の登城の際白書院で出仕の藩士たち、年始に拝謁できなかった藩士たちのあいさつをこの日にうけている。「昌興日記」同日条には、

辰下剋、小書院江御出^{熨斗目半上下}、御腰物生駒右近役之、

などと記しており、綱紀が出座したのを小書院としている。このことから白書院＝小書院であることが裏付けられる。注意しなければならないのは、「白書院」とよばれていた部屋が、ある時点を境として「小書院」と呼び替えられたのではないという点である。すなわち、「昌興日記」によれば、「白書院」の呼称は、この日記が書き始められた延宝5年にはすでに存しており、貞享3年9月18日条を最後に見られなくなるが、一方で「小書院」は延宝5年から元禄5年にいたるまで見られることがわかるから、両者が同じ部屋のことを示すのであれば、2つの呼称が併用されていたことを示している。おそらくは、綱紀の時代を境に、白書院から徐々に小書院へと名称が移行し、小書院という名が定着していったのだろう。

それでは、次に白書院はどのような機能を有した部屋であったのであろうか。「昌興日記」のうち「白書院」を記した部分を抄出すると、目に付くのは、人持組の士以下の藩士たちが月次や節句の際に白書院で拝謁している点である。

延宝8年10月1日、15日には前田孝貞・奥村庸礼らのちに八家となった人々が熨斗^{もちひら}鮑を白書院で拝領している。月次の登城できわめて重要な役割をはたしていた部屋であったことがわかる。

次に黒書院をみよう。黒書院についても白書院同様、この時期に特有の部屋であった。

「昌興日記」では、天和元年から元禄3年の間で記事がみられる。田中氏によれば、「参議公年表」元禄6年元日の

朔日 雨降、辰下刻假御装束^{直衣・風折烏帽子}、黒書院上段 御着座、安房守・駿河守^{各布衣}年始御礼申上、

称記述
院であ

院
之
史

二之丸
をあら
とな
院」と

始
始

ること
を境と
、「白
日条を
とがわ
ている。
が定着

のうち
句の際
完で拝

年表」

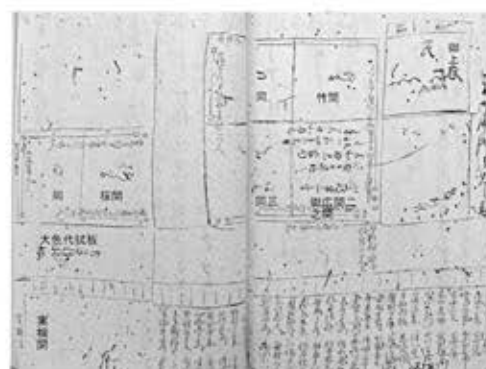
— 37 —

としている。一方、「竹間」の縁側に面する部屋を「御広間二之間」、その下の部屋を「同三（御広間三の間）」と呼称していたことがわかる。すなわち、このスケッチにより諸士が着座していたのは、「御広間」二の間、正房らが着座していたのは、「竹間」であったことになり、先の貞享3年11月25日の記述と符合するのである。

一方で、昌興は、貞享3年8月1日条に「御広間」であるべきところに「竹之間」とも記しており、おそらくは、当時「竹の間」と「御広間」とは厳密な区別はしてはいなかったともとれる。

文化の大火後に再建され、明治まで現存した竹の間の襖絵には、上段・下段と2つの二の間・三の間境には金地に緑竹がえがかれていたというから、江戸前期においても同様の意匠であったことが予想され、厳密な区別はされにくかった状況があったのかもしれない。

なお、後期でいうところの下段と二の間は、高麗縁という格式の高い畳縁であったことが確認できる。前期も同じ意匠であったとすれば、「御広間」との呼称はこのことと関係あるだろうか。



「葛巻日記」元禄3年11月13日条



「葛巻日記」
貞享3年8月1日条

（3）大広間と大書院

次に「大広間」について述べたい。「昌興日記」を根拠とすれば、「大広間」は、この時期でしかあらわれてこない「大書院」と同じ部屋をさしている可能性が非常にたかい。

「大広間」については、さきの貞享3年11月25日の史料によって、「御広間」二の間に着座した諸士と「大広間」に出座した藩主と襖障子一枚で仕切られた位置関係にあった事がすでに確認できている。

天和2年11月13日条によると、鷹の鶴を拝領し、祝能を行ったことを記しているが、「大書院」上段の下に着座した藩主綱紀は、「竹の間」に群居した重臣前田直作ら藩士の拝謁をうけていて、襖障子が開かれ、拝謁となっている。この記述は、「大広間」と全く同じであり、「大広間」と「大書院」が同じ場所をさすものである可能性が非常に高いことを物語っている。

「大書院」は、「昌興日記」では、延宝5年から貞享2年までみられ、一方の「大広間」は、延宝7年から元禄3年にみられるので、同じ部屋であれば、この間併用されていたことがわかる。

次に問題となるのは、「大広間」もしくは「大書院」と「御広間」ないし「竹の間」との関係である。私は、「大広間」ないし「大書院」が「竹の間」「御広間」を含む200畳全体の呼称ではないかと考えている。「大広間」「御広間」とあえて区別しなければならない必然性、そしてなによりも「大」の字を付している点である。元禄5年12月15日条には次の表現がある。この日將軍家から「御料紙」・「硯箱」「丁字釜」を拝領し、姫君や年寄たちが拝見している。能が興行され、中入り時に料理がふるまわれ、安房以下若年寄中までが「奥書院」で御料理を頂戴した。人持・諸頭等が「大広間竹之間」で料理を振る舞われているが、この「大広間竹之間」をどうみるべきであろうか。「大広間・竹之間」とすべきであろうか。「大広間・竹之間」であれば、「大広間」と「竹の間」が別個の部屋となってしまう、別個の部屋だとすれば「大広間」もしくは「大書院」は上段・下段をさすことになるだろう。しかし、「大広間」が、藩主が出座する場所であることを考えあわせると、この場所で藩主が料理が振る舞われたとは考えにくい。したがって、「大広間竹之間」なのであり、大広間の内の竹の間という意味になるであろう。200畳以上全体を大広間と呼称したと考えるならば、元禄3年10月15日に宝円寺らに料理を振る舞った、その席を大広間二・三の間、竹の間一、二の間としたという文章理の理解は

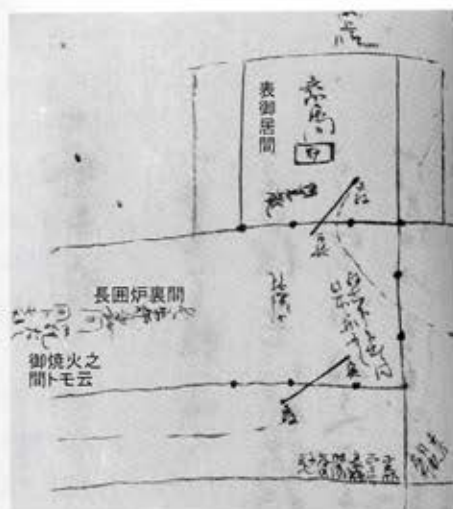
比較的スムーズとなろう。とするならば、併用されつつも貞享2年ころから次第に「大書院」という呼称から次第に「大広間」という呼称へ移行するようになっていったとみられるのではない。さらに、緑竹のえがかれた間を含む200畳全体を通称的に次第に竹の間と呼び慣わすようになったのではないだろうか。

さて、この「大広間」（「大書院」、のちの「竹の間」）では、將軍家から拝領した鶴の披露を行った際など藩主と藩士たちの対面の場であったこと、元日御礼や謡初場所であったことが確認できる。これらは機能面で若干の修正はあろうが、竹の間と通称することが多くなり、一般化してのちの時代に受け継がれている。

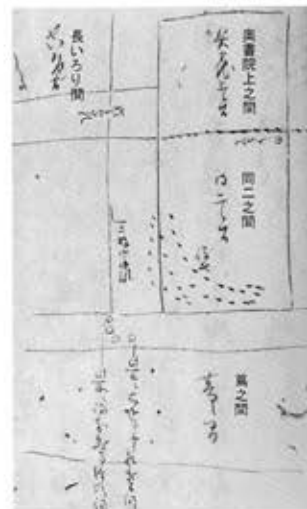
（4）長囲炉裏の間と表居間

長囲炉裏の間が、囲炉裏に由来した部屋であったことに異論はなかろう。後代にはその名称が見い出せないで、この時期特有の呼称の部屋であった。

家老役前田貞親の日記「前田貞親手記」⁽²⁸⁾では、「御焼火之間」として登場する。この長囲炉裏の間が城内のどこにあったかは、不明で、囲炉裏が記載されている部屋は絵図で確認できるものの、特定するにはいたっていない。一般に「焼火の間」は、「料理の間」とも称したともいうから⁽²⁵⁾、位置を確認するうえでは参考になるであろう。そして、「昌興日記」貞享4年3月15日の記述は手がかりを与えてくれよう。この日は、月次の登城日であるので、本来ならば藩士たちは登城すべき日であったが、知行判物の申し渡しがあったことから登城はなかった。申し渡しは長囲炉裏の間でおこなわれ、判物をうけたのは、津田玄蕃（孟昭、家老役）・奥村因幡（應輝、家老役）ほかの藩士であった。津田・奥村は、間のうち2畳目で拝領し、この日同様に判物をうけた人持組奥野小隼人は間のうち1畳目で頭戴した。その際、藩主は、表御居間に着座していることから、「長囲炉裏の間」は「表御居間」と隣接していなければならない。この点について、「葛巻日記」を読み進めると、元禄元年12月17日条、12月26日条に、この日の記事とともに関連した部屋の間取りを昌興が大まかにスケッチしているので、ここで位置関係がはっきりできた（下図参考）。12月16日、江戸の將軍家から御鷹の鶴一雙が金沢にもたらされ、綱紀は表御居間に出座し、拝領している。鶴は奥書院上の間の屏風に懸けおかれ、26日には、鶴が藩士たちに披露され、鶴の汁が振る舞われた。昌興のスケッチによると、奥書院一、二の間と表御居間と長囲炉裏の間、さらには薦の間が、隣接していたことが記され、貴重な証言となっている。



「葛巻日記」元禄元年12月17日条



「葛巻日記」元禄元年12月26日条

長圀炉裏の間縁類に同公した本多政長・前田孝貞・奥村時成・長 尚連は、長圀炉裏の間にて料理が下され、藩主に陪席したことなど、執政クラスの人々が料理を下さる場として機能し、能役者竹田権兵衛やそのせがれ庄五郎、春藤万右衛門らが長圀炉裏の間で謡を仰せつけられたという記述もみられる。

(5) 能舞台

綱紀の時代、すなわち元禄のころは、将軍綱吉の影響もあって、各藩でも能楽が盛んとなった。加賀藩でも能の振興がはかられ、宝生流発展への基がつくられた。将軍綱吉は、自ら舞い、諸大名たちにも演ずるように命じていたから、綱紀は貞享2年、小鼓稽古を20年ぶりに再開し、翌3年から本格的にシテの稽古に入った⁽²⁹⁾。それにつれて江戸ばかりではなく金沢においても能舞台の整備にとりかかったようである。

従来、この時期の金沢城の能舞台について、一棟あった能舞台の存在は、当該期の絵図をみるうえで、重要なメルクマールとなりえていた。一方、「昌興日記」貞享3年8月26日条によると、御居間前に舞台が作られていることがわかる。

この舞台に対する藩主綱紀の思い入れは大きかったようで、舞台の出来に綱紀は不満で、建て直しを命じている。この年綱紀は5月4日に江戸を起ち、同月15日には金沢に到着しているから、そのころ舞台の普請に着手したものであろうか。位置関係からみると、これまで知られている舞台ではなく、別物であることが判明する。従来知られたものは、「昌興日記」にもあらわれる表舞台であり、このとき出来たのは、奥舞台であると考えられる。奥舞台は、御居間前に所在しているという以外は、舞台らしい建物が絵図には記されていない。

延宝7年2月7日条をみると、年があらたまり初めての能をおこなったが、竹の間をもって舞台としたといい、能舞台が存在しなかったか、あるいは普請中であることを推測することができるが、江戸においては畳をあげて能舞台としているから、奥舞台とは、はたして鏡の間・橋がかりを有するような能舞台ではなく、室内にしつらうようなものを奥舞台と称したのではあるまいか。

こうしてできた奥舞台においては、綱紀は、「ならし」すなわち、能の稽古に使用しており、養女御恭にも一覧させている。

(6) 「御座間」と「御居間」

一般に、御座間とは、天皇、摂関家、将軍家など出御の座席を設けた部屋を指すが⁽³⁰⁾、金沢城の場合には、藩主が着座する部屋ということになる。

「金沢城二之丸座敷之図」や「金沢城座敷之図二之丸」などの絵図には、「御座間」が記されておらず、その場所の特定には到らない。御居間廻りに存していることは予想されるが、明確ではない。

「御座間」というネーミングから近い存在と思われるのは、「御座敷」とか「御居間」と呼称される部屋であろう。

このうち、「御座敷」については、前掲「御在国覚書」の天和元年元日条によると、料理人原田市郎左衛門による恒例の鶴の包丁が、「御座之間」縁類で行われ、それが終わると、綱紀は「表之座敷」に入って奥小將の御礼を請け、「御座之間」で御膳を召し上がったという記載があるから、これでみる限り「御座間」と「表座敷」は別個の部屋である。

同日の「昌興日記」では、「御居間」で鶴の包丁を行ったとし、御膳を召し上がったのを「御居間」としているから、「御座の間」は「御居間」である可能性がでてきた。でも「昌興日記」天和3年元日の記述には、「御座間」「御居間」と区別し併記されているから、即断はできない。「金沢城二之丸座敷之図」では「御ね間」に隣接する場所や近辺に「御居間」が何カ所かみられるから、このうちの

いずれかだったのかもしれない。今後の検討が必要となる。

なお、「御座間」には「表御座間」と「奥御座間」が確認でき、表座間も奥座間も、元禄になってみられるようになる。「御座間」上段で、將軍家から拝領の屏風や丁字釜を姫君達に披露しているほか、元日に大服茶・蓬莱が献上され、襖障子が開かれて、政務を聴くという記述がみられる。

また、表座間では、病氣回復のため登城した前田直作（備後）や奥村庸礼（壱岐）も拝謁しているなど重臣の拝謁する場所であった。また、使者として江戸へ遣わされていた九里甚左衛門らが表御座間に召されている。一方奥座間では、具足餅御祝がおこなわれている。

（7）奥書院

奥書院は、後代の史料にもみられ、藩主が在国していた年の元日には諸大夫の拝謁の場として機能し、「国格類聚」⁽³¹⁾にもその旨が記されている。絵図としては、18世紀前半を景観を描いているとされる「金沢城図」（横山隆昭氏所蔵）にはじめて登場する。

「昌興日記」では、天和3年3月25日条を初見とし、以降日記の終わる元禄5年にいたるまで継続する。遅くとも17世紀後半には定着していた部屋であることがわかる。

前田与十郎（孝貞）や奥村兵部（應輝）が遺領の判物を請け（天和3年3月25日条）、藩の老中がお目見えをし、能の興行の際に年寄らが料理を頂戴する部屋として使われている。のちの八家が大きく関わる部屋であった。

少し時代はくだるが、宝永4年の元日には、藩主綱紀の子富五郎（のちの大聖寺藩主前田利章）が、奥書院において父に拝謁しているの⁽³²⁾、きわめて格式の高い部屋であったと考えられる。

（8）御居間書院

御居間書院も17世紀より一貫して御居間廻りに存した部屋である。「国格類聚」によれば、文化年間御居間書院の役割として、「年寄中等毎日被召、表向之面々都而被為召、御近習之人々諸御礼・同御印物頂戴」などと記され、年寄中や表向の人々が毎日召され、近習の人々の拝謁や印物頂戴の場所として機能していた。11代藩主前田治脩の日記⁽³³⁾でも、毎日、政務・人事等に関して年寄や家老が御居間書院に出役してそれぞれの案件について藩主の意向を伺い、必要に応じて召し出されるなど、藩主の政務の場として機能していた。

さらに遡って享保19年の例によると⁽³⁴⁾、元日の儀礼で、藩主吉徳に対して勝丸（のちの7代藩主宗綱）が拝謁したのも、御居間書院であった。それでは、綱紀の時代の御居間書院はどうであったのか。絵図には、上段を兼ね備えた「御居間書院」がみられ、古くから存したことがうかがえる。「昌興日記」では延宝5年から貞享3年まで関連の記事がみられるから、延宝には存していた。

元日の記事を見ると、大書院に出座し、諸士の拝礼を請けた綱紀は、その後御居間書院にはいり、奥小將らの拝礼をうけたことが記される。また、年始の御礼として登城した大聖寺藩主前田利明とは、この御居間書院と対面したり、貞享元年11月には、水野次郎右衛門（300石）が判物を請けている。年寄中の召集記事こそ確認できなかったが、後代と同様の用途として機能していたようである。この時代の政務のあり方を今一度検討しなければならない。

（9）桐の間

桐の間もこの時代にも受け継がれた部屋である。前期金沢城を描いた「金沢城図」（金沢市立玉川図書館蔵）などでも呼称を認めることができる。

「昌興日記」によると、元禄2年より見られるから、17世紀後半には存している。能見物を命ぜらせた中川意伴（長種 5000石）が桐の間で料理を下された記事、奥小將のうち御前伺公の面々や徒横

易については、「せがれ吉左衛門、生得、宜しからざる者にて、天明五年、改易に相成り候」(「戸室山初年号等留帳」後藤文庫213号)と彦三郎が指摘する。天明5年9月から始まった前藩主重教による人事粛清の余波によるものと推察できる。

(16)「泰雲院様御石櫛之図」(金沢市立玉川図書館、清水文庫蔵)。

(17) 文化元年9月「家業之書」(後藤文庫102号、86頁)。

(18) 後藤文庫の秘伝書・秘伝図には年記のないものが約20点ほどあったが、記載内容、筆跡、印などを検討し、表3では、年記の明確な秘伝書との関連性が認められた場合、仮に同一年次とみて配置することにした。たとえば104号は、無年記だが、標題の類似性や内容からみて元和・寛永秘伝の91号の関連文書とみて寛永10年に配置した。

(19) 北垣前掲1987は、すでに彦三郎筆跡の秘伝書50点をおよび小十郎自筆の秘伝書8点について、自署のあるものとないものに区別し、リストアップしていた。今回の再調査は、この識別を土台に作業をすすめた。

(20)「高石垣等之事」(後藤文庫100号、315頁)では、「高石垣の角、むずかしき三つのうち第一は、辰巳御櫓下、二には三ノ角、三つは二ノ角なり。辰巳ハ出角故、大きにむつかしく、高石垣はいずれも、難しくことなり。辰巳下石垣は、安永二年に曲尺合い違い候事、初は笑候へども、此度の高石垣にて、むずかしき事悉く会得仕り候。かつて相違を笑い申す事にてはなく、穴生の指図もなくに、まだ是程に出来は手柄なり。只今にては少し苦心に候」と、高石垣の修築の難しさを指摘したあと、「元来、石切共は細に積む事を各好み、大石垣に用ひ御用に立ち申す者と見切り置き候者すら、此度の積み方、間にあいかね、とかく好みの所へ至り候故、ケ様に存じ寄らざる細さに相い成る。御扶持人石切等の内にも、辰巳下シノギ角御石垣御用相勤め候者もこれ有り候へども、積み方の意を知らざる故、石切へも、会得致し候様に申し聞かせ候穴生もなく、此度我等罷出候節は、積む所々へ相廻り指図致し候へども、同役、其心にも成ざる故、我等指図の石、かえって直し候様に相い成り候故、積み方宜しからず。煩候故、是非なく不行届、残念なる事に候。我等煩申さず候はば、ケ様の積み方は仕らせず、石切も手初め故、古石垣とは格別之違に相なり候へども、白徒(素人)の分り申す事にてもなく、我等一身に善悪を存ずる事に候。それ故、又候御普請の節は、便とも相成るべきかと調え置き候」(原漢文を書下す)と反省の弁が続く。

(21) 北垣前掲1987、42～57頁。

(22) 90号のこの部分は「唯子一人伝」に引用されなかったが、この中にみえる「金府」という用語は元和元年のものとして違和感がある。

(23) 秘伝書の様式についての検証が必要だが、河野文庫(金沢市立玉川図書館蔵)の江戸中期以後の武芸秘伝書の体裁と共通性がある。

(24) 北垣前掲1987、57頁。

2章

(1) 喜内敏氏が『金沢城郭史料』(670～671頁)で、後藤家の石垣勾配ラインを「包絡線」と説明したのは誤りで、「包絡線」に該当するのは、熊本に伝来する「石垣秘伝之書」(北川作兵衛の写本もある)の説く勾配ラインである。なお、西田一彦氏らのグループも後藤流石垣勾配理論を踏まえた石垣遺構の研究をすすめている(西田一彦・森本浩行・西形達明・玉野富雄「城郭石垣断面形状の設計法とその数式表示に関する考察」(『土木学会論文集』750号Ⅲ—65、2003年)、同「城郭石垣の反り曲線勾配部分への2次曲線の適用に関する考察」など)。

(2) 文化13年「石垣にかやり三様之事」(後藤文庫128号)

(3) 喜内敏『金沢城郭史料』解説672頁。北垣前掲書1987の第三章表5(127頁)。

(4) 北垣1987前掲書、128頁。

(5) 史料原文(417頁)で「矩よわく」というのは矩が短い、つまり勾配を急に築くという意味である。付言すれば(表6)で門台石垣18尺以下の5例と20尺以下の4例を比べると、文化元年も文政7年もあまり差はない。切石積の門台石垣の場合、渡り櫓内側では門柱(脇柱)との間隔を詰めるため、90度に近い勾配が要求された。

(6) 城内高石垣の適正勾配の認識に、こうした差異が生じた理由として、ほかに、たとえば計測方法の改善で計測結果が改訂されたことも考えられる。いずれにしても、彦三郎にこうした認識変化を促した事件として、文化

目が役儀の誓詞をおこなったという記事、年寄中・若年寄がうどんを下されたという記事がみられるなど、この時期は、重臣クラスの藩士が儀式の際などに料理を下される部屋として機能していた。

(10) 芙蓉の間

「国格類聚」によれば「芙蓉之御間 芙蓉なけし高花鳥
碁天井ノ内金白鱗形 右近但、出席
之節」とあり、右近、おそらくは大野木右近（人持 1650石）の席となっている。

「昌興日記」によると、元禄3年以降に登場するから、これ以前には存在していた。記述をみると、次のような使われ方を有していた。一、二例あげよう。番頭などの藩士は、竹の間において將軍家から屏風を拝領した旨の披露をうけているが、そうした情報を昌興は、芙蓉の間で聞いている（元禄3年11月13日）。また、昌興は奥小將としての勤めで江戸から届いた書状をこの芙蓉の間に持参、年寄らが披見したという記事がある。さらに、具足餅をこの部屋で拝領したという記事があるから、奥小將に関係の深い部屋であったとみることができよう。

(11) 檜の間

絵図をみていくと、檜垣の間が確認できるが、はたして檜の間と同じ部屋をさすものなのか、明らかではない。「葛巻日記」では、天和2年より記述が見られるが、この部屋は平士等との関係が深く、前田了心や京都芳春院がお目見えののち料理を檜の間に拝領している。また、小將頭・金沢町奉行らの役儀仰せ付けや免除の申し渡し、諸士名跡相続、奏者番や公事場奉行らがこの部屋で拝領物を得ている。

(12) 菊の間・実検の間

さきにみた元禄元年の昌興のスケッチによれば、実検の間の向かい、幕末期に虎の間とされているあたりに存したのが菊の間である。ここでは、吉村宗利が菊の間縁類で羽織・判銀を拝領したほか、奥能舞台で能が興行され、前田了心は奥書院で料理を拝領しているが、年寄ら重臣は、菊の間に料理を振る舞われている。元禄2年正月19日には、具足餅の披露がおこなわれ、大老・家老・若年寄は料理を菊の間に拝領している。

実検の間については、用例が一例しか得られなかったが、仏事の際に僧たちに竹の間、実検の間の見物をさせていることが見える。

3 元日の御礼

以上、「昌興日記」にみえる主要な部屋について、部屋毎にその呼称や使途について述べてきた。後年の状況とは異なっていることが伺えるであろう。その様子は、年中行事的な儀礼の際により目立つであろう。最後に17世紀の城内儀礼についてふれてみたい。

城内における城内儀礼のうち最も重要であると考えられるのが、元日にはじまる年頭儀礼である。「国格類聚」においては、一項目をもうけているほか、昌興の甥にあたる大野木克寛の日記（註34参照）をはじめ、多くの諸士が年頭儀礼について紙幅を費やしているのは、彼らにとっていかに重要であったかがうかがえよう。

年頭御礼は、元日にはじまり2月まで続くのであるが、ここでは、元日の動きをとりあげ、部屋の使われ方を確認しておきたい。天和2年の場合を項目的に記そう。

卯刻	綱紀、御座間出座
	大服茶・蓬菜等献上
辰后刻	綱紀、御居間に出座（熨斗目・長袴着用）

御恭姫様・御節姫様から年始進上物の目録披露

(若年寄奥村恵輝から奏者番へ手渡し、御前に持参)

綱紀、大書院へ出座

- ・腰物 葛巻昌興
- ・先立 奥村恵輝
- ・白書院への廊下に伺公し、そこから供奉
 - ・横山正房、前田貞親、前田孝行
- ・薄の間に伺候、藩主に先立ち大広間に参
 - ・本多政長・前田孝貞・奥村庸礼・奥村時成
- ・大広間縁通に列居
 - ・馬廻組頭・御小將組頭・新番御徒小頭・平組御徒頭など
- ・大広間御左の方
 - ・横山正房・前田孝行・奥村恵輝など
- ・御次番などあらかじめ伺公

綱紀、大書院上段の下に着座

腰物御左におく、御後屏風のうちに奏者番屏風の内に伺公

諸士御礼

富山藩主前田正甫使者→七日市藩主前田利豊使者→旗本横山知清使者
→旗本本多但政使者→富山藩主使者自分御礼→本多政長・前田孝貞・奥村庸礼・奥村時成・前田直作・長尚連・横山任風・村井親長・小幡長好・横山正房、その他人持・諸組頭・諸物頭・番頭→横目→使番など

午后刻

綱紀、御座間に入る

(御座間に入る前に檜の間に控える金工師後藤理兵衛・同勘兵衛父子が通りがかり綱紀に御礼)

表座敷出座、料理人原田市郎左衛門による鶴の包丁を御覧

綱紀、御座間へ

この一連の儀礼の動きをみれば、江戸中後期の内容とは異なることがあることがわかる。例えば、諸士拝礼は、老中以下、医師にいたるまで順次大広間でおこなわれているが、職制の改革を経て、元禄4年以降年寄のなかに諸大夫に任ぜられる人々があらわれるようになると、藩主への拝謁場所は切り離されるようになり、奥書院において諸大夫が、小書院においては、叙爵以前の年寄・家老・若年寄がおこなうようになり、人持以下の諸士が竹の間(大広間)で行うようになる。「大野木克寛日記」享保3年元日条によれば、叙爵以前の年寄・家老・若年寄が小書院で拝謁するのは、この年が最初であると記されていて、部屋の使われ方は未だ流動的な要素を含んでいたことを示している。このように、職制が整備されるにつれ、城内の儀式も変化を遂げるのであり、各部屋の使われ方も自ずと変更される要素を多分にふくんでいた。

おわりに

以上、「昌興日記」の記述を抄出し、これをもとに17世紀後半の金沢城二ノ丸御殿の状況、とくに各部屋の名称や用途について考察してきた。最近、二ノ丸御殿絵図の研究が進むなかで、この時期の文獻にどのように書かれているかが課題とされており、本稿では、「昌興日記」を通してそれに応えたものとなっている。

この時期の絵図に記載されている文字情報は、すべてを網羅しているわけではなく、この日記によってほぼ補完することができたと考えている。

「昌興日記」に記される御殿各部屋の呼称については、「白書院」「黒書院」や「長囲炉裏の間」などのように、この時期特有のものが見られる一方、「御居間書院」「奥書院」などのちの時代と同じ呼称が用いられている部屋もあった。しかし、たとえ同じ呼称の部屋であっても、使途の面からみると、必ずしも後代ものと同じとは限らず、時代によって一様でなかったことを示している。また、「白書院」が「小書院」へ、「黒書院」が「柳の間」へと呼称変化があるなかで、延宝から元禄ごろにかけては、双方の名称が混用されている様子も見取れた。

17世紀後半といえば、5代藩主綱紀の代で、藩機構の整備が進められた時期にあたる。保科正之の後見から独り立ちしなければならなかった綱紀は、親裁体制の強化をはかるとともに、諸職の改編を進めた。特に有名なのは貞享の職制改革で、貞享3年に老臣の職を大老一人持組頭一家老一若年寄に再編成し、のちの世襲の執政家である年寄衆八家制度成立への足がかりとした⁽³⁵⁾。また、藩主家の家紋である剣梅鉢紋を定紋としたのも延宝期とされ、その濫用を禁止して藩主家による独占化が図られ、梅鉢紋は一族の重臣にも免許され、いわば一族老臣の統制策に活用された⁽³⁶⁾。さらに延宝5年には、本多政長・横山忠次・前田孝貞・奥村庸礼・奥村時成の5人の年寄に対して、藩主家への忠勤、仕置きを正しく行うよう起請文を認めさせている⁽³⁷⁾。つまり、綱紀は、藩主としての権威を相対的に高めるとともに、それに見合った組織作りに努めたといえることができる。

二ノ丸御殿では、ほぼ時同じく貞享3年から元禄10年にかけて段階的に藩主の生活空間である御居間廻りや奥の部分を中心に、のべ1455坪におよぶ大規模な作事（増築）が進められるのであり、御殿の歴史を語るうえでおおきな転換期となった。のちに3000坪ほどあったという御殿の大きさにほぼ近づき、拡張を契機とし、藩主が御殿内部のあり方を改めていこうとするのは、むしろ自然の成り行きであっただろう。

前田家では、元禄以降、年寄衆のなかから4人の枠で叙爵されることが常例となり、八家は、いわば叙爵する家柄としてのステイタスを得られるようになる。

こうした時代背景のなかで、御殿において、儀礼の場などを目にみえる形で執政たちを頂点としていかにあらたな身分秩序を構築していくかが、藩主の課題なのであり、呼称や使途の変化もこれと無関係ではないであろう。

近年、襖絵や杉戸絵等には、その場所に相応しい画題があるという指摘があるが⁽³⁸⁾、御殿空間について考えていくうえで傾聴に値するのであり、御殿の変遷や各部屋の機能を解明するうえで留意すべきであろう。

註

- (1) 田中徳英「金沢城二の丸御殿の用途による部屋の構成」（金沢城研究調査室『金沢城研究』第3号 2005）
- (2) 「金沢城全城絵図の分類と編年」（金沢城研究調査室『金沢城研究』第2号 2004）
- (3) 請求番号 16.40-75
- (4) 加越能文庫 請求番号 16.01-5
- (5) 木越隆三「加賀藩改作仕法の基礎的研究（慶安編）」（『石川県立金沢錦丘高等学校紀要』第22号 1994）、なお加越能文庫「諸士系譜」（請求番号 16.31-49）では昌俊を家老役とする。
- (6) 例えば、金沢市立玉川図書館「加州金沢城図」、東京大学附属図書館南葵文庫「加州金沢之城図」、国立公文書館内閣文庫「加州金沢城図」など
- (7) 加越能文庫 請求番号16.90-10
- (8) 加越能文庫 請求番号16.90-11、石川県立図書館森田文庫 請求番号 k208-22

- (9) 加越能文庫 請求番号16. 90-12
- (10) 石川県立図書館森田文庫「家宝珍書」k288. 5-17 所収
- (11) 年未詳6月15日前田利家書状、高爪神社所蔵、『増訂加能古文書』2394号文書、なお石川県美術館図録『前田利家展』(1973年)には原本の写真が掲載されている。
- (12) 「城中建物焼失旧新記帳」(後藤家文書、『金沢城郭史料』1976 所収)
- (13) 前掲「城中建物焼失旧新記帳」には、「御本丸御屋形者往古下間法橋、或者七里参河守等が建立いたし候家作ニ御住居、此御建物不残炎上也」とある。
- (14) 「三壺聞書」卷之十三(石川県図書館協会『三壺聞書』1972 復刻版)
- (15) 本丸の御殿については、宝暦9年の大火以前の景観を描いた絵図に「御広間」「番所」の文字が見える。
- (16) 木越隆三「元和～寛文期の金沢城修築について」(『金沢城研究』創刊号 2003)
- (17) 寛文2年の修補願図として「加州金沢城絵図」、ほかに寛文7年の修補願図として「金沢二丸石垣御普請の絵図」、寛文11年の修理願図として「加州金沢城石垣崩所伺の絵図」がそれぞれ前田育徳会に所蔵されている。
- (18) 「金沢市史」資料編8 28頁～31頁
- (19) 浜岡氏「金沢城絵図の年代比定について」(『市史かなざわ』第8号 2002)
- (20) 木越氏「金沢城の地割図と二の丸御殿図」(『金沢城研究』第3号 2005)
- (21) 田中氏前掲論文
- (22) 加越能文庫「元禄雑記」請求番号16.43-113。なお、「元禄雑記」は、昌興の兄克明の著である。
- (23) 金沢城についての基本的な資料を集めた『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ』(金沢城史料編、石川県教育委員会 1991)には、宝永5年条に『加賀藩史料』より6代吉徳正室松姫(將軍綱吉養女)来嫁の記事を収載するが、これは、江戸屋敷に関わる記事で、金沢城関係のものではなく、こうした基本的なミスは除外しなければならないという反省点がある。そのため、「葛巻日記」の記載する延宝5年から元禄5年の間で綱紀が在国した時期を確定することは必要不可欠である。神田由築・森下徹両氏は、『加賀藩史料』や「御参勤帰国之記」(金沢市立玉川図書館所蔵)を典拠として寛文元年から慶応3年の「加賀藩藩主参勤交代表」をまとめられ、歴代の藩主たちがいつ金沢を発って江戸に着いたか、あるいはいつ江戸を発って、金沢着の日程が一目でわかるような図を作成されているが、(東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4『文献・絵図史料から見た加賀藩本郷邸』)今回これに若干手を加え、下記のような在国の期間が確定することができた。すなわちこの間の記載は、特別な注記がないかぎり基本的に金沢城の内容となる。

綱紀の在国状況の把握

	金沢発	江戸着	江戸発	金沢着
延宝5	4月2日	4月13日		
6			6月28日	7月11日
7	3月26日	4月9日		
8			9月9日	9月22日
天和元	3月25日	4月6日		
2			3月25日	4月6日
3	4月2日	4月13日		
貞享元			4月26日	5月9日
2	3月26日	4月6日		
3			5月4日	5月15日
4	4月1日	4月10日		
元禄元			6月4日	6月15日
2	3月29日	4月9日		
3			5月22日	6月6日
4	3月29日	4月10日		
5			9月29日	10月9日

(在国期間)

～延宝5年4月2日
 延宝6年7月11日～7年3月26日
 延宝8年9月22日～天和元3月25日
 天和2年4月6日～天和3年4月2日
 貞享元年5月9日～貞享2年3月26日
 元禄元年6月15日～元禄2年3月29日
 元禄3年6月6日～元禄4年3月29日
 元禄5年10月9日～

- (24) 武家儀礼の研究は、二木謙一氏の研究を嚆矢として1980年代から飛躍的に進んだ分野である。二木氏の研究は、室町期を中心に江戸前期にまで及んでいる。近世の武家儀礼については、近年さかんにおこなわれるようにな

っており、標題に儀礼を冠している単行本に大友一雄『日本近世国家と儀礼』（吉川弘文館 1999）、岡崎寛徳『近世武家社会の儀礼と交際』（校倉書房 2006）などがある。

- (25) 彦根城博物館叢書『譜代大名井伊家の儀礼』（サンライズ出版 2004）
- (26) 加越能文庫16.11-75。「参議公年表」には、62冊本と青地礼幹編になるものがある。田中氏が根拠とし、引用したのは、前者。
- (27) 加越能文庫、請求番号16.41-80
- (28) 加越能文庫 請求番号16.41-82、なお、加越能文庫架蔵「前田貞親手記」（全65冊）は、明治期に前田編輯方で筆写された写本であり、原本は確認されていない。
- (29) 長山直治「『葛巻昌興日記』にみる前田綱紀の能稽古の端緒」（石川県郷土史学会々誌第29号 1996）
- (30) 『日本国語大辞典』（小学館）「ござ」の項目
- (31) 「国格類聚」は、「北藩秘鑑」ともいわれ、加越能文庫（請求番号16.23-44、16.23-45）等に架蔵される。なお、『金沢市史』資料編2 藩制（2001）に一部を、藩法史料叢書刊行会編『藩法史料叢書2 金沢藩』（創文社 2001）には全文を翻刻している。
- (32) 加越能文庫「前田修理日記」請求番号16.41-94
- (33) 前田育徳会架蔵。現在長山直治氏の手により翻刻作業が進められており、第1巻が『太梁公日記』の標題で続群書類従刊行会から刊行されている。
- (34) 例えば「大野木克寛日記」（加越能文庫 請求番号16.40-78）など
- (35) 貞享3年の職制改革については、拙稿「加賀藩における貞享の職制改革について」（『加能地域史』第32号 2000年）がある。
- (36) 拙稿「享保十九年剣梅輪鉢紋一件について」（『市史かなざわ』第3号 1997）
- (37) 『加賀藩史料』第四編 延宝5年4月朔日条
- (38) 太田昌子「服属儀礼と城郭の障壁画」（池享編『天下統一と朝鮮侵略』吉川弘文館 2003）など

【参考】

「葛巻昌興日記」に見える金沢城二ノ丸御殿の記述（抄）

「葛巻昌興日記」の記述のなかから、「白書院」「黒書院」「大書院」「長閑炉裏の間」について、二ノ丸御殿各部屋の記述を抄出したものである。

（ア）白書院

年代	月日	内 容
延宝5	1月4日	9つ半前大書院御出、御弓初め、追付退座、白書院で家中せがれ・与力等御礼
延宝6	9月9日	出仕の面々白書院でお目見え
延宝6	9月15日	出仕の面々白書院でお目見え
延宝6	12月1日	出仕の面々白書院でお目見え
延宝7	1月4日	御射初にて大広間へ御出座、追っ付き白書院で家中の面々のせがれ御礼申し上げる、終わって御居間前馬場で馬乗初
延宝7	1月15日	出仕の面々白書院でお目見え
延宝7	2月15日	巳後刻、出仕の面々白書院でお目見え
延宝7	3月3日	出仕の面々白書院でお目見え
延宝8	10月1日	辰刻表座敷に御出→辰中刻白書院において前田孝貞・奥村庸礼等・人持・組頭・物頭ら熨斗鮑頂戴
延宝8	10月15日	白書院に御出、前田孝行・奥村庸礼ら諸士熨斗鮑拝領→御礼済み、御居間に入る→表座敷にて領知判物くださる

延宝8	11月1日	巳刻以前白書院御出、出仕面々如例→巳中刻御居間に入る→本多政長、江戸より帰着、表座敷で御目見え→小書院にて惣並熨斗鮑頂戴
延宝8	12月1日	5つ半過、白書院へ御出、月次御礼
延宝8	12月15日	辰中刻白書院に御出、老中・人持・組頭・御徒頭・足輕頭等お目見え
天和2	8月1日	白書院で老中・人持・組頭・諸物頭等お目見え
天和3	1月4日	射初につき大書院に御出座、白書院に御出座、人持・組頭・物頭等の息お目見え
天和3	1月6日	領国中寺社方お目見え、巳刻以後大書院に御出座
天和3	2月19日	今枝内記・品川蔵人・津田惣五郎ら御居間でお目見え
天和3	3月3日	白書院御出座
貞享元	5月15日	出仕の面々白書院でお目見え
貞享3	7月25日	今般普請につき白書院・奥方の内に御しつらい仰せつけられる、今日ここへお移り、御次番・近習諸役人等檜の間へ伺候
貞享3	7月26日	只今までの御居間廻り、今日より毀しに取りかかる、白書院にて六浦・桜門壺(壺装束)折を舞う、太鼓は手拍子
貞享3	8月1日	4時過大広間下段御出座、式日の通お目見え・馬廻二組お目見え、三井寺・法喜院破拝謁(今般の御普請では白書院・御居間・舞台を仰せ付けられたので、先年御居間普請の際のように大広間でお目見え)
貞享3	9月18日	笹原六郎左衛門江戸より帰る、白書院においてお目見え、奥村時成誘引

(イ) 黒書院

年代	月日	内 容
天和元	1月4日	弓始、大書院上段の下に着座して御覧→御居間→小書院で藩士の御礼を請ける、大書院より御居間へ入るとき、黒書院で諸町人一統御礼
天和3	1月3日	巳刻 大書院出座、馬廻・定番馬廻・組外与力御礼、終わって午後刻黒書院で御用間町人御通懸群居一統拝礼
貞享2	1月2日	辰后刻大書院出座(昨日石川・河北当番物頭等御礼)→黒書院(手猿楽一同御礼)→寄附の間入り口で検校2人御礼、6半時ころより大書院で謡初
貞享2	1月3日	4半過大書院で成瀬当胤ら御礼→黒書院で諸町人一同拝礼
元禄3	11月13日	藩士ら屏風拝見、未刻人持以下御広間において饗応、諸番頭以下は桜の間、前田直堅・本多政敏父子・奥村有輝ら黒書院上の間で饗応
元禄3	11月14日	人持6人・頭分の輩・隠居の面々拝見仰せつけらる、午刻、中川意半・斎藤中務・水原知閑など隠居の輩・大野知石・生駒右近・新蔵・昌興は黒書院上の間で下さる

(ウ) 大書院

年代	月日	内 容
延宝5	1月1日	5つ半大書院御出、諸礼、9つ過御居間書院で近習組面々・幼少の馬廻組の士御礼、終わって御居間に入り、鶴の包丁
延宝5	1月2日	4つ時分大書院御出、諸御礼、終わって御居間、夜5つ前大書院で謡初、5つ半過終わって御居間に入る
延宝5	1月3日	宝円寺参詣後大書院で御礼を請ける
延宝5	1月4日	9つ半前大書院御出、御弓初め、追付退座、白書院で家中せがれ・与力等御礼
延宝5	1月8日	4つ時分大書院御出、寺社方御礼
延宝5	2月21日	能見物のため5つ半前大書院出御、上段の下に着座、御恭様は小書院で見物
延宝6年	12月19日	拝領の鶴披露のため、家老・人持・組頭・物頭大書院で料理くださる
天和元	1月1日	寅下刻、御居間御出座、辰刻大書院上段下御着座(熨斗目・長袴)→御居間で鶴の包丁→表座敷で奥小將の面々御礼→御居間に入、御祝の膳
天和元	1月2日	辰后刻、大書院へ御出、上段の下に御着座、藩士たちの御礼を請ける、謡初、酉下刻大書院へ御出、上段の下に御着座、
天和元	1月3日	高德院忌日につき宝円寺参詣、帰城後、大書院上段の下に御着座、藩士御礼

天和元	1月4日	弓始、大書院上段の下に御着座→御居間→小書院で藩士の御礼を請ける、大書院より入るとき、黒書院で諸町人一統御礼
天和元	1月6日	辰下刻大書院上段の下に御着座、領国寺院・神職御礼
天和2	11月13日	拝領鶴披露・能あり、辰刻 大書院御出、上段の下着座、竹の間に前田直作ら群居、襖障子左右に開き、一統お目見、座を直して能鑑賞（姫君様は小書院から御簾をかけて見物）、表居間で鶴頂戴
天和3	1月1日	卯刻 御座間に御出座 大服茶・蓬萊献上、辰刻 御居間出座（熨斗目・半上下）、御恭様より年始進物・目録披露、次に大書院御出座
天和3	1月2日	謡初、酉后刻大書院に御出座
天和3	1月3日	巳刻 大書院に御出座、馬廻・定番馬廻・組外与力御礼、終わって午後刻黒書院で御用聞町人御通懸群居一統拝礼
天和3	1月4日	射初につき大書院に御出座、ついで白書院に御出座、人持・組頭・物頭等の息お目見
天和3	1月6日	領国中寺社方お目見え、巳刻以後大書院に御出座
貞享元	11月15日	卯下刻大書院に御出、登城の面々竹の間列座、御間の襖障子を開く、一統お目見え、次いで能挙行
貞享2	1月1日	卯中刻御座間に出座（大服茶・蓬萊三方）→襖明け、囲炉裏の間に暫時着座（御恭姫様・節姫様・僊溪院より年始祝詞→辰刻以前大書院に御出座下段に御着座（富山藩主等使者・諸士御礼→御居間書院に御出座（奥小將御礼）
貞享2	1月2日	辰后刻大書院出座（昨日石川・河北門当番物頭等御礼）→黒書院（手猿楽一同御礼）→寄附の間入り口で検校2人御礼、6半時ころより大書院謡初
貞享2	1月3日	4半過大書院で成瀬当胤ら御礼→黒書院で諸町人一同拝礼
貞享2	1月4日	4過大書院に御出座、吉田左太夫らの射儀御覧、4つ半過小書院に御出座、大聖寺藩主使者の御礼・人持・諸組頭・諸番頭等の子供御礼→昼過御居間前馬場で乗初
貞享2	1月6日	4時前大書院に御出座、寺社御礼

(エ) 長囲炉裏の間

年代	月日	内 容
貞享3	11月6日	江戸より奉書到来、御應の鶴拝領、長囲炉裏の間で御頂戴
貞享3	11月25日	拝領の鶴披露、5半以前大広間に御出座、御先立前田孝行、御広間2の間に登城の面々群居、間の外御左の方に本多政長・前田孝貞・奥村時成・長尚連、御右の方（竹の間の方）に横山正房・津田孟昭・奥村恵輝着座、間の襖障子、前田貞親・孝行双方明け、一統お目見え→能開始、御広間御左の方大廊下に安房・佐渡・伊与ら、御右の方に村井親長・小幡長次以下人持・諸組・諸物頭伺公→能4番が済み、中入、表居間に御出座、政長・孝貞・時成・尚連を召しだす、長囲炉裏の間縁頼に伺公、御相伴、長囲炉裏の間にて4人料理下さる、孟昭等は奥書院で料理くださる、人持・諸頭等は広間で料理下さる、今日の御広間の御座所は勿論、2、3の間も同じく翠簾かけらる
貞享3	12月17日	御宮より還城後、平田内匠長囲炉裏の間でお目見え→昨日職原抄献呈の褒美を奥書院二の間で下さる
貞享4	1月13日	三吉助右衛門伊勢より帰参、長囲炉裏の間縁頼において御目見得
貞享4	3月7日	馬廻組頭仰せ渡し（津田求馬ら）以後長囲炉裏の間にて御目見得
貞享4	3月10日	役儀仰せ付けらる面々・免除の人々松の間にて佐渡演説、のち長囲炉裏の間で御目見え
貞享4	3月11日	徒頭・聞番・横目・使番、大老中・家老役列座のもと佐渡演説、その後長囲炉裏の間で御目見え
貞享4	3月13日	足輕頭・小將横目仰せつけられ、長囲炉裏の間で御目見え
貞享4	3月15日	知行方判物・印物を下されたので例月の出仕なし、午刻少し過、長囲炉裏の間において津田孟昭・奥村恵輝らへ判物下さる、御着座は表居間、頂戴の席は長囲炉裏の間内2畳目、奥野小隼人は人持組であるので、間内1畳目にて頂戴、山崎主税らは1畳目で請取、小書院へ御出座、役儀御礼
貞享4	3月22日	多賀信濃、加領の御礼（於 長囲炉裏の間）
元禄元	11月6日	御恭様気色快気の御祝い、御能挙行（奥舞台）、本多政長・前田孝貞ら・中川意伴は長囲炉裏の間で料理下さる、

書院より

一統お目見

頂戴

御出座

書院で御

息お目見

目見え、

(御恭姫
宮山藩主

同御礼)

聖寺藩

の面々
竹の間
方明け、
方に村
に御出
長圀炉
大広間
る

奥書院

目見え
裏の間

こおい
の間間
は1畳

意伴は

元禄元	12月26日	拝領鷹の鶴披露、例月朔望出仕の輩に料理くださる、綱紀、辰下刻大広間へ御出座、登城の面々一統お目見え、本多政長・前田孝貞・奥村時成ら双方に分かれ伺公、(前田直作所勞により登城せず)、村井親長・小幡長次以下人持・諸頭・本多主殿・堀右京等大広間并竹の間に群居、御間の襖障子左右に開きお目見え、追付表居間に御着座、政長・孝貞以下七手之頭中御前に召され、相伴、鶴の汁頂戴→綱紀、奥居間へ、右面々長圀炉裏の間へ入り、北の方御襖障子を後ろに1列着座、料理出、多賀直方が使いとして罷向、御酒のうえ御出座、大広間で頂戴の面々には筑後・玄蕃が使いとして罷り向かう、横山正房・津田孟昭・前田貞親・対馬・玉井勘解由は、奥書院で頂戴、桐の間では、藤田平兵衛・永井伝七郎らに料理出、表振廻方にかかっていた奏者番や組頭・御用人は、御饗応ののち柳の間において頂戴→大広間御出→未后刻御恭様奥居間御出、料理、鶴の料理、奥書院で囃子あり、表向饗応後表居間出座、前田助丞役儀仰せつけられありがたき旨津田玄蕃披露
元禄2年	元日	卯の后刻奥居間に座、辰后刻蓬萊大服茶、辰下刻大広間に座(長袴)、矢天井屏風内に奏者番さぶらう、御広間三の間御衝立の後に奥村恵輝・津田孟昭ら拝伏→奥御居間→表居間で鶴包丁(於長圀炉裏の間縁煩で料理人が行う)
元禄2年	3月1日	例月出仕なし、知行方判物下さる、午刻表居間出座、奥村因幡判物頂戴、長圀炉裏の間において前田孝貞授ける
元禄2年	3月15日	知行の判物下されるに付き、月次出仕無し、巳后刻表居間に御出座、青山将監、判物を長圀炉裏の間御間のうち2畳目にて頂戴、伴数馬も同じ、長谷川主計ら御印物を1畳目にて拝領、ついで小書院出座、水原主税・馬廻ら判物・印物拝領
元禄3	10月6日	江戸で拝領の屏風、姫君様に披露、奥舞台で能興行、辰后刻表座間上段に屏風たて置き、お姫様にお目にかけ、ついで能興行、同所で重臣ら拝見・お目見え、奥御次へ通り、能拝見、若年寄等奥書院・了心・横山正房らは長圀炉裏の間を仕つらい、料理下さる、定番頭・近習頭中・御用人・町奉行は桐の間、奥小将・番頭・小将横目らは御膳所で料理頂戴
元禄3	10月19日	御恭様口切御茶献上、表において姫様方一所に御祝(表居間)、本多政長・前田孝貞ら桐の間2の間で御膳料理下さる、定番頭野村与三兵衛ら葛の間溜で料理下さる、桐の間で拍子・仕舞ならびに狂言仰せ付けらる、長圀炉裏の間に簾垂れる、老中・若老は桐の間北の方溜で見物、次綱紀自身の仕舞あり、前田貞親・玉井貞信、御恭様附人ら桐の間所々溜に着座、桐の間南方縁煩に有賀・藤田・小泉、近習ら伺公、近習頭・奥小将番頭・奥小将横目・新蔵・昌興御膳所でお下がりの料理下さる、あり合わせの定番番頭稲垣八郎左衛門ら葛の間溜で料理くださる